蔵DE Books
としょだより

ほんとしおり

Vol.3

2016年9月発行

街の灯りになりたくて

3年前の秋、蔵DE Nightというイベントで、チャップリンの『街の灯』を上映しました。第一回目の開催で不安だらけでしたが、ある女性が「とてもいい映画だったわよ」とおっしゃってくださいました。とても嬉しくて、やって良かったと思ったことを覚えています。

この映画は、街中で出会った貧しい盲目の女性を励ます為に、チャップリンがあの手この手で奮闘する物語。笑いと優しさに満ちた素敵な映画です。あの時の女性の言葉が、『街の灯』の物語と重なって、もう一度上映したい、出来れば、また蔵DE Nightで。と思ったことが今年、実現できました。

この街で蔵＊武projectの活動を始め、これまで沢山の人達に励ましてもらいました。市役所の方や、いろんなお店の人達、そして何より蔵に来たお客さん達。近隣に比べるとあまり元気がないといわれている矢板ですが、この街には数字や金額では表せない「人」という優しい灯りがここかしこに。私もその一つになって、誰かに元気を与える人になれればと思います。

蔵DE Booksは十月で一年。こちらも多くのありがたい言葉に支えられています。この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。次の一年もまた、本を片手に楽しいことをと考えています。

もくじ

蔵DE Books としょだより

ほんとしおり

Vol.3
2016年
9月号

3 ビブリオバトル開催しました。
4 歴史散歩　天狗党が来た道をゆく
6 本棚拝見。第三回　坂本　敏夫さん（ノンフィクション作家）
8 としょがかりの声①
旅×本　第三回「会津手塚治虫キャラクタースタンプを巡る旅」
としょがかりの声②
10 「物語を支える主人公の魅力　第二回」
11 オススメの本『星の王子様さま』
としょがかりの声③「山の不思議」
12 ご案内
蔵のイベント情報／利用案内／寄贈について

街の灯りに
なりたくて

第1回 ビブリオバトル 開催しました！

『また、同じ夢を見ていた』Uさん
『優しいあかりにつつまれて』Mさん
『少女』Oさん
『日本妖怪大全』Sさん
『アルネのつくりかた』Yさん
『獣の奏者』Aさん
『仏果を得ず』（参考本：『あやつられ文楽鑑賞』）Tさん

エントリー作品はこちら！！

静かそうに見えても、読書家たちの熱戦が繰り広げられている。

（左）今回エントリーされた本がずらり。アピールポイントは表紙の美しさや物語性など、様々。（右）本の紹介のあとの回し読み。どれに投票しようかな…。

ビブリオバトルとは、みんなで集まって楽しく本を紹介し合い、一番読みたくなった本（チャンプ本）を投票で決めます。日本語では書評合戦。涼しい蔵の中で、熱戦を繰り広げました。

まずは初対面の人もいるので自己紹介から。そして、みんなの緊張がほぐれた後、いよいよ5分間の本の紹介に入ります。実際に話してみると5分は長いですね。

質問タイムを交えながら、無事本の紹介が終わりました。

そして…みんなの投票の結果、初代チャンプ本は『仏果を得ず』に決定！

Tさんおめでとうございます！

選んだ本も紹介の仕方も違うけれど、「この本が好き」という熱い気持ちはみんな一緒でした。あなたも、大好きな本を持って蔵でおしゃべりしてみませんか？

※チャンプ本『仏果を得ず』は、蔵DE Booksに寄贈されています。ぜひお一読ください。

初代
チャンプ本

『仏果を得ず』

三浦しをん 作
双葉文庫
文楽の太夫の世界に人生をかける青年の青春物語。Tさんが文楽の面白さをしるきっかけとなった一冊。

～ほんとしおりについて～

昨年秋にオープンした蔵DE Booksを、たくさんの人に親しみをもって利用してほしいという思いで作っています。

矢板武記念館の蔵を人と文化が交わる場所に再生することを目的とした蔵＊武project。その中から有志数名が「としょがかり」として蔵DE Booksの管理、運営をしています。本好き、旅好き、カフェ好き、元バンドマン（キーボード担当）。ちょっと不思議なとしょがかりメンバーによる自由気ままな読み物や、本にまつわるあれこれ、そして蔵のイベント情報を楽しく元気にお届けいたします。

本にしおりをはさんだら、
一息ついて次は何する？

秋の風、
山のひびき。

秋の風、
蔵のしずけさ。

秋の風、
ページのおと。

秋の風、
珈琲のにおい。

蔵DE Books

歴史散歩

夏草や兵どもが夢の跡

天狗党が来た道をゆく

天狗党を知ったのは、我が家にある「矢板市史」という一冊の本から。矢板市の歴史や土地の謂れなどが記された中で、天狗党の話は真に迫ったものがあり、妙に心に残ったのでした。「日本の夜明け」が遠い昔となった今、当時の動乱を少しでも感じてみたいと、彼らが通った道を辿ってみることに。

天狗党は会津街道を通り、石上宿（現大田原上石上）から箒川を渡り山田宿まで来たようです。渡河地点ははっきり分かっていませんが、山田の農道を進み、川岸へ。水は見えずとも、見渡す限りの田んぼの緑と遠くの山。

（上）埃を被っていた我が家の『矢板市史』。（中）箒川沿いの山田のどかな田園風景。（下）千年カヤには梅のような実がなっていた。

天狗党襲来とは―幕末の矢板のひと騒動―

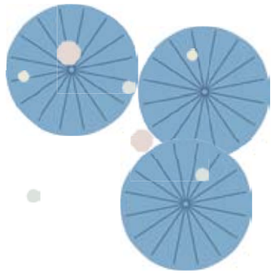
元治元年（1868年）11月4日。水戸藩で尊皇攘夷を唱える武田耕雲斎率いる天狗党一行は、自らの主張を推し進める為に京都に向う途中、行く先々で暴挙を働いていました。彼らの横暴ぶりに並みいる豪商も震え上がるほど。そんな天狗党が、箒川を渡り、山田宿（現矢板市山田）までやってくる聞いて、さあ大変。物語のはじまりです。

対岸には、石上地区の集落も見えてなかなかの眺め。

天狗党が立ち寄り、作戦会議を開いた下の問屋の伊東家の書院があった場所に立つ「千年カヤ」。（伊東家は明治の大火で焼失）市の指定文化財となっています。とても立派な枝ぶり。山田宿には上の問屋の高野家と、下の問屋の伊東家が半月交代で営んでいたそう。その日は上の問屋の番でしたが、上の問屋は天狗党襲来の知らせに、提灯を捨てて慌てて逃げてしまったそうです。

山田から荒井へ。会津中街道があったとされる、丘陵を登る。木々が生い茂り、車がぎりぎりすれ違える細い道。車の中はエアコンで快適ですが、天狗党襲来の日は40センチもの積雪だったとか。今と違い舗装されてない山道を歩く苦労は計り知れず。そう考えるうちに、「割山下の一里塚」が。石碑のようなものを想像していたら、土をこんもりと盛ってある。この形にはどんな意味があるのだろう…。街道は塚の後ろの雑木林へ続きます。熊が出そうで、おそるおそる進むと、ぎゃー！蜘蛛の巣の罠に。「クマ」ではなく「クモ」と格闘。と、道の先にはもう一つの一里塚の姿。この塚は二つの塚が対になってるそう。でもこれ以上進む勇気はなく退散。

最後は長興寺。途中、塩谷神社も。そう、ここは川崎城のお膝元であり、長興寺は川崎城主塩谷朝業が開いたお寺。天狗党は、対立する諸生派の水戸藩士が長興寺に匿われていると聞き、押し入りました。水戸藩士の姉は下長井塩谷院秀賢夫人。



（左）市の指定史跡である割山下の一里塚と（右）この雑木林の先にもう一つの一里塚。

秀賢夫人が駆けつけると、ちょうど寺では栗ご飯が炊き上がったばかり。天狗党に捕らえられた弟との最後の別れに栗ご飯を食べさせたそう。そんな悲話が残る長興寺も現在はのどかなお寺。小径には十二支の動物と戯れるお地蔵様が12体。お地蔵さん達の愛らしさに和みつつ、散歩は終了。

天狗党はその後、会津街道を外れ鬼怒川方面へ。そして最後は苦しい運命を辿りますが、日本は彼らが待ち望んでいた新しい時代を迎えました。今回の散歩で、激動の時代の名残りを僅かに感じることができました。緑の稲穂の向こうに、あの日の雪景色がはるか遠くに見えた…？気がします。

（左下）長興寺の入口に「塩谷山」の文字。（右下）十二支地蔵が並ぶ寺の小径。

［参考文献］①『矢板市史』／矢板市史編集委員会
②『矢板の古道』／矢板市教育委員会
③「やいたの昔の話」矢板市文化財愛護協会

本棚は、心を映す鏡なり。

本棚拝見。

本棚拝見！
（改め、書籍紹介？）

第三回
坂本　敏夫さん
ノンフィクション作家

（右左）貴重な作家の執筆風景と、その向こうで高く積まれた本棚。

またまたやらせていただきました。本棚拝見、始めて参ります。三回目となる今回のゲストは、なんと作家の坂本敏夫さん。（実はメンバー小町の伯父さんなんです。）執筆活動で忙しい中、本棚を拝見させていただきました。

坂本さんは、元刑務官の経験を活かし、刑務所の実態を描いたノンフィクションを執筆。刑務所の情報公開や死刑制度の廃止を訴えてきました。今回のインタビューでは、そんな坂本さんの「書く」ことへのこだわりについて聞くことができました。

「作家」の本棚　～真実へのこだわり～

本棚を見てまず感じたのが、日本史関係の書物と辞書の多さ！　まさに事実を丹念に積み上げて描いていくノンフィクション作家ならではの本棚ですね。ちなみに、坂本さんのお気に入りの本は三島由紀夫の『春の雪』からなる四部作だそうです。

そして、やはりお聞きしておきたいのが「書く」ということについてです。坂本さんに、執筆するうえで気を遣っていることは何かお伺いしたところ、「ウソを書かないこと」というお答えをいただきました。ノンフィクションを書くことにはある種の「怖さ」があることでしょう。それは、誤った事柄を事実として世の中に発表してしまうことです。特に、歴史資料を参考にノンフィクションを書こうとする場合には、歴史の中の真実にたどり着くことは非常に難しいことになります。事実と史実。言葉は似ていますが、意味するところは全く違います。というのも事実は実際に起こった出来事なのに対して、史実には、その史料の執筆者独自の歴史のとらえ方が反映されています。なので、史料から事実を読み取ろうとするときには、史料から執筆者の主観を極力排除する必要があるとのことでした。

（左右）「行刑史」というジャンルの本や、『矯正実務六法』という本刑務官ならではの本も。

新作『典獄と934人のメロス』について　～歴史の闇に葬り去られた真実～

昨年12月に坂本さんの新作、『典獄と934人のメロス』が刊行されました。毎日新聞や週刊新潮、そのほか様々な地方紙で書評がつくなど、話題沸騰中の本書。坂本さんが筆に込めた思いをお伺いしました。

本書は公的な記録に残らない93年前の出来事に光を当てています。1923年（大正12年）9月1日の関東大震災で横浜刑務所は建物がすべて全半壊し、後に焼失。現在の刑務所長にあたる典獄の椎名通蔵は、監獄法の規定により死者と重軽傷者らを除く934人を、24時間以内に戻ることを条件に開放するという前例のない判断を下します。

受刑者全員の顔、氏名を覚え、その良心を信じた上での判断であったそうです。2か月後の確認により、遅れて出頭した者も含め受刑者934人全員帰還していたことが分かります。

本来なら英断として後世に伝えられそうな出来事ですが、この事実がありのまま伝えられることはありませんでした。横浜刑務所の解放は、受刑者の中の朝鮮人が井戸に毒を投げ入れたという根も葉もない噂を立てることに繋がり、最終的に朝鮮人狩りという悲劇を引き起こす結果に。典獄の椎名通蔵がいわれのない責任を負う形で、解放の真相は歴史の闇に姿を消すこととなります。関係している文書記録も、なぜかほとんど残っていないということでした。

坂本さんが解放の真相に迫る契機となったのは、受刑者の妹の長女との出会いだったそうです。話を聞くにつれ疑念が生じ、調べていく過程で疑いが確信へと変わっていったそうです。そうして30年に及ぶ取材と4年の執筆期間を経て、本書を書き上げたといいます。

歴史の中に埋もれた関東大震災の悲劇を掘り起こし、知られざる真実に光を当てた渾身のノンフィクション。綿密な取材に裏打ちされたリアルな記述とすがすがしい読後感が素晴らしい本書。読んでみてはいかがでしょうか？

新作『典獄と 934 人のメロスを手に。赤に黒い文字の表紙は坂本さんに負けない迫力が。

〈坂本　敏夫さん　プロフィール〉

熊本県生まれ。1994年に広島拘置所総務部長を最後に退官。その後作家となる。『刑務官』『刑務所のすべて』などの著書多数。また、『13階段』『愛の流刑地　後編』などのテレビドラマの監修を務めるなど、多方面で活躍中。

としょがかりの声①

旅×本

文／写真 やよい

第三回 会津手塚治虫キャラクタースタンプラリーを巡る旅

今回はおとなり福島県へ行ってきました。季節は夏！青春18きっぷを使った電車の旅予定だったのですが、急遽車での旅となりました。

1. 時代劇に出てきそうな風景がそのまま残る大内宿。2. 名物いももちは焼きたてを味わえる。3. 歴史の荒波に飲まれながら、今や会津のシンボルとなった会津若松城。4. 透き通ったスープの喜多方ラーメン。5, 猪苗代の景色は車窓から眺めて堪能。6. 旅に行ったら地酒を買うのも楽しい。

スタンプを集めながら会津の見どころを回れば一石二鳥

まずはたじまの道の駅で観光情報を仕入れました。（行くところも決まっていないノープラン）そこで「会津手塚治虫キャラクタースタンプラリー」の台紙を発見！なんでも手塚治虫は会津が大好きで漫画の舞台にもなったそうです。これはやるしかないでしょう！と今回の旅はスタンプ巡りに決定しました。目指せC賞（福島の特産品詰め合わせ）♪

まずは大内宿へ。会津西街道の宿場町として栄えた大内宿は、茅葺の建物が建ち並び江戸の風情を漂わせます。まち並み全体が、国選定重要伝統的建造物群保存地区に指定され、地元の方々が景観の保存を行っています。7月でしたが、標高が高いため少し肌寒いくらいでした。売り子のお姉さんの会津弁とほっこりとする郷土の味、いももちを楽しんで次の目的地を目指します。スタンプ1つ目GET！

続いて会津若松城へGO。天守閣の展示で会津の歴史を学びつつ登ります。改めてみると、会津地方の権力者は移り変わりが激しいですね。蘆名→伊達→蒲生→上杉→加藤→保科（改名して松平）。会津若松城は、全国で唯一の赤瓦を使用しているとか。天守閣から白虎隊の隊士たちが眠る飯盛山を眺めて偲びました。スタンプ2つ目GET！

お昼は少し足をのばして喜多方ラーメン！せっかくなので有名店に行ったところ、平日の2時過ぎでもお店は一杯…。待ち時間とともに期待が高まるラーメンは、透き通ったあっさりしたスープと太めの麺がほんとにおいしかったです。スタンプ3つ目もGETして、喜多方を後にしました。

最後は猪苗代へ。本当は野口英世記念館に寄りたかったのですが、閉館間近だったため断念。代わりに道を挟んだガラス館とお菓子館に立ち寄りました。お土産も購入して、車窓から猪苗代湖を眺めつつ帰路につきました。

帰路に就くその前に…最後のスタンプGETのため、猪苗代観光協会を目指したのですが…。あれ？ナビに入力すると「目的地まであと1時間です」…嘘だ～。ほんとにこっちでいいの？という不安を抱きながらもなんとか目的地に到着し、最後のスタンプも無事にGETできました！迷子になるのも旅の醍醐味だな～と再確認しました。

スタンプラリー特産品セット当たりますように！

本の紹介

『会津とっておきの歴史』

野口信一著

会津武士の気風が現れているエピソードが沢山。我慢強い・筋を通す会津の武士たちの気風が感じられます。この本を読んでから会津旅行すると、より楽しめるかも？

としょがかりの声②

物語を支える主人公の魅力！

～第二回～

文　小町

前回は、主人公の魅力によって物語がより面白くなっていくことと、物語の面白さを支える主人公の魅力にはいくつかの種類があることを紹介した。今回はそれに引き続き、平家物語の中の「泊瀬六代」というストーリーを取り上げ、さらなる主人公の秘密に迫ってみたい。

「泊瀬六代」では、行家と常陸房の一騎打ちが丹念に描写されている。しかしそうした筆者の労力が込められた場面であるにも関わらず、平家物語としてこれまで貫いてきた姿勢を裏切るような描写が次々と登場する。行家を追う常陸房が逃亡先に関する情報を得て、その場所へ向かうが、そこにはすでに行家はおらず……といった状況が繰り返されるたらい回しの構造なっている。この構造からは感動を誘う物語というよりは喜劇のような笑いを誘った遊戯じみた話という印象の方が強いように思える。また、二という数字を使った言葉遊びがエピソードを通じて散りばめられており、ここからも「遊び」が感じられる。また、この行家自身の人柄の奇抜さを表す行動としては、常陸坊に頭を石で打ち割られた時の言動が挙げられる。

常陸坊が石で攻撃したのを見た行家は、刀で攻撃しないのかと言いいきなり笑い出すのである。頭をかち割られているのに余裕綽々な態度はある種の強さを示す描写と取れないこともない。けれども、真面目な決闘の場面でそうした笑いはなんとも場にそぐわない。これまでの「扇の的」や「敦盛の最後」での感動的な話は何だったのか！　ということにもなりかねず、平家物語らしくない書き方だと考えることもできる。

このように見ていくと、この源行家という人物はこれまでの話で中心人物が持っていたような善性とはまるで無縁の人物のように見えてくる。

しかし、ここで私が強調しておきたいのは、この源行家がとても魅力的な人物であるということだ。重盛のような思慮深さや知盛のような勇ましさはないが人間的で見ていて飽きないキャラクターとも言える。

他の古典作品にも物語の登場人物の中で王道の魅力ではなく、ある種トリックスター的な魅力を持つ者がいなかったのだろうか？　私はそんなことを考えながらこの記事を書く事にした。そうして見つけたのが『古事記』に登場するヤマトタケルである。次回は、ヤマトタケルの性格、性質について考え、物語をどう支えているか考えてみたい。

おすすめ本

『星の王子さま』
サン・テグジュペリ 作
池澤 夏樹 訳
集英社文庫

すべての元子供たちへ贈る物語

砂漠に不時着したパイロットである「ぼく」と星の王子さまのお話です。

王子さまの住むちいさな星には１本の特別な花がありました。とてもきれいだけど、わがままな花から逃げ出して王子さまは旅をすることにしました。

旅の中でいろいろな星を訪れいろいろな人に出会います。王様、うぬぼれ男、酒飲み、ビジネスマン……。そして７番目に地球へとやって来ました。王子さまは旅の中でいろんなことに気づきます。「肝心なことは目では見えない」大人になるにつれて忘れてしまった大切な事を教えてくれる本です。

蔵にあります！
『星の王子さま』の世界がもっと広がる一冊！

『星の王子さま天文ノート』
縣 秀彦（国立天文台）監修
河出書房新社

星座の話や幻想的な星雲の写真など。星の王子さまを読んで宇宙のロマンをもっと知りたくなったらコレ！

『「星の王子さま」が教えてくれたこと』
ポール・ムニエ 著 / 藤野 邦夫 訳
武田ランダムハウスジャパン

一見わかりにくい物語に隠された、メッセージとは。『星の王子さま』を哲学の視点から紐解きます。

としょがかりの声③

遠野物語と妖怪
②「山の不思議」

文　大納言

今年から八月に山の日という祝日ができました。山が多い日本にとても似合う祝日だなと個人的には思います。

さてそんな山が多い国日本。遠野の山にも妖怪はたくさん住んでいます。

そもそも遠野地方というのが山に囲まれた地形なため、ほとんどの話が山で進行するといっても過言ではありません。

前回お話ししたマヨイガなんかも山の怪異ですしね。

こんなお話もあります。とある年老いた猟師が真っ白なシカに遭遇した。さっそく猟師はシカを撃つが微動だにしない。恐る恐る近づくとなんとそれは大きな白い岩だった…。これは山の魔障がみせたもので自分に引退を促したのだと思った猟師はそのまま引退してしまったという。まあ言ってしまえば年老いた猟師が岩とシカの区別がつかないほど視力が衰えたという話なのでしょうが、遠野の山ならもしかしたら…と想像を掻きたてられます。

○ ご案内

小さな蔵の映画祭

場所：矢板武記念館西蔵

開場：10:00

上映開始：10:10

上映作品

11/26(土)「モダン・タイムス」

12/23(金)「チャップリン
からの贈り物」

本だけ
じゃない

**蔵の
イベント
情報**

他にも楽しいイベント企画中。
蔵＊武 project の活動については
Facebook ページ是非ご覧ください。

蔵 DE Books 利用案内

入館料１００円。
（蔵で飲み物の提供あり）

・貸出し可。（一人２冊。２週間まで）

※駐車場はありません。
市役所駐車場をご利用ください。

・利用時間（注）片付け時間を含む。

４月～１０月　９：４５～１５：３０

１１月～３月　１０：１５～１４：３０

休館日は月曜、火曜、祝日の翌日及び、
年末年始（１２月２７日～１月５日）

本の寄贈について

受付日：毎月最終土曜日

受付先：矢板武記念館受付

※スペース等の都合により、
本を本棚に並べられない
こともあります。

※公序良俗に反するもの、
宗教や思想色の強い本を
並べることは出来ません。

まちライブラリーに加入しています。

まちライブラリーとは、まちのあちこちに本棚を置き、本を通して人との縁を繋ぐ活動です。全国で展開しています。

寄贈の際は、メッセージカードに感想などを記入してください。

本に付いたメッセージカードが次々に本を読んだ人たちの想いを伝えていきます。

蔵 DE Books の全ての本にはまちライブラリーのシールを貼付。

本が好き、楽しい事が好きな方。

としょがかりメンバー募集！！

一緒に蔵 DE Books を盛り上げませんか？活動内容は蔵 DE Books の運営、本に関するイベントを行うなど。興味がありましたら、
p.kuratake@gmail.com までご連絡ください。

蔵＊武 project とは
矢板武記念館の蔵を人が集まる場所に再生することを目的に、矢板武塾卒生を中心とした２０～３０代の若者達が活動。
お問い合わせ：p.kuratake@gmail.com までメール